

8月12日、仙台厚生病院にて、順天堂大学天野教授のお話、仙台厚生病院で医師として働き、国境なき医師団に登録されている、仙台二高のOBの池田先生のお話を聞き、また、病院の中の案内もしてもらった。

天野教授のお話は2時からを予定していたが、手術の都合で、先に病院の中を案内してもらった。それぞれの科の先生方が集まる院局などを案内してもらい、遠藤先生に、胃や肺、子宮を見せてもらった。本物の人間の臓器を生で見るのは初めてで、すごく感動した。はじめに見た胃は、大きな癌があり、癌の部分に触ってみると、他の部分に比べてとても硬く、色も少し黒っぽかった。その次に見た肺は、半分の大きさのものだったけど、とても小さくて、触り心地はスポンジみたいな感じだった。気管支も見えたけど、思っていたよりも細く、数もあまりなかった。最後に見た子宮は、腫瘍が横についていたのを、切り外されたのを見たが、何も言わないで渡されたときは何か分からず、言われてもよくわからなかった。子宮についていた腫瘍はとても大きくて、こんなに大きな腫瘍が体内にできるなんて恐ろしいと思った。とても短い時間ではあったけど、今まで体験できなかったことが体験できてよかった。

1時間ほどの案内のあと、天野教授の手術が終わり、天野教授との会談を行った。時間がなかったので、質問に答えていただくだけとなったが、とても良いお話が聞けた。手術に失敗したとき、モチベーションをどう保っているのかという質問に対して、「手術には失敗なんてのはほとんどなくて、手術室で亡くなっちゃったら失敗ってなるんだろうけど、もしそんなことしたら僕はこの仕事をやめるね。」と言っていたのが印象的だった。また、天皇の手術は緊張しなかったかという質問に対しては、「手術する前は特にいつもの手術と変わらないと思っていて、逆にいつもの設備より充実した、東京大学の手術室を使えると聞いてとてもワクワクしていた。手術が終わってから、自分はかなり大変なことをしたんだということに気づいて、その時は少しヒヤヒヤした。」と言っていて、天皇の手術を前にしても、楽しめていることが、やはり違うなと思った。天野教授は、名医とアマチュア医師の違いについても話していたが、「名医は先を見る力があり、この先どうなるかというシナリオを自分の中で作れるけど、アマチュア医師は、目の前で手がいっぱいになっている。」と言っていた。中学校の時から、先を見て行動しろと言われていたので、この話を聞いて、あらためて先を見て行動することの大切さを知った。また、高校時代にしておくべきことは、英語をしっかりと勉強しておくことと、パソコンやiPadを使いこなせるようにしておくことだそうだ。10分間程度の短い時間だったけど、とても素晴らしいお話が聞けてよかった。天野教授から得たものを、これからの自分の人生に活かしていきたい。

天野教授のお話が終わった後、仙台二高OBの池田先生のお話を聞いた。池田先生は、国境なき医師団に登録されていて、はじめに国境なき医師団について話してくれた。国境なき医師団は、1971年にフランスで結成され、医師とジャーナリストをメインに、それを支えるロジスティシャン（物資調達管理調整員）、アドミンストレーター（財務・人事管理責任者）、水・衛生管理専門家、建築・建設専門家などにより、構成されていて、団体名に「医師」とついているが、医療従事者は5割程度しかいないそうだ。また、この団体の目的は、中立・独立・公平な立場での医療・人道援助活動を行うことで、紛争地域では、武装した軍人であろうが一般市民であろうが、関係なく同じように手当をするそうだ。池田先生は、イエメンという、サウジアラビアの南方にある国の、沿岸部にある都市、アデンに派遣された経験があり、その時の体験も話してくれ

た。ミッションに向かうには、外科医の場合、整形外科や産婦人科などで必要とされる技術を持っていなくてはならず、行く前にそれらを勉強してから行ったそう。イエメンのアデンに派遣されたとき、アデンは激しい紛争の中であって、あちらこちらで銃声や空爆の音が聞こえ、ときには爆風で病院のガラスが割れたこともあったそう。そんな危険な環境ではあったけれど、活動を行う病院施設や宿泊する環境は、他の国境なき医師団のものとは比べて格段によく、はじめての派遣にはとてもやりやすい環境だったそう。池田先生は外科医としてミッションに向かったため、手術は1日に何件もこなして、4週間、それに加えて追加の2週間、計6週間で、300件近くの手術を行ったそう。国境なき医師団でのお話を聞いた後、質問する時間があったので、色々な質問をした。どうして国境なき医師団を目指したのかという質問に対しては、「高校3年生のときに、二高で国境なき医師団の先生による講演があって、それまでは医師という職業に興味は持っていなかったのだけれども、私たちがこうして寝ているあいだに何人も人が亡くなっているという話を聞き、それが心に響いて、国境なき医師団を目指そうと思った。たまたまこのときに、国境なき医師団がノーベル平和賞をとったのも、理由の1つかな。」と話していて、二高の講演会で、将来の道を決めることができ、今まさにその道の上にいることができているのは凄いなと思った。イエメンに行き、何か心境に変化はあったかという質問に対しては、「もともと、外国で治療することを目標としてやってきたのだから、心境の変化というものはなかった。」と話していて、自分が思っていたのと違かったなら、心境に何か変化があると思うから、外国での診療や患者のことについて、かなり真剣に調べていたんだと思った。手術する環境を整えるのは大変じゃなかったかという質問に対しては、「さっきも言ったけれど、イエメンの病院施設はとても充実していて、あと、土木関係の専門家が、不十分な場所を整備してくれるから、自分が大変だということはない。」と話していた。イエメンは空爆などがよくありとても危険な場所だけれど、そこで活動を行うことに恐怖心とかはなかったかという質問に対しては、「不安はあったけれども、宿泊する場所には地下室があり、空爆に備えることができ、武装した組織がいる場所や、こちらの方角に近づいているなどの情報は、ロジスティシヤンの人が管理していて、我々のセキュリティーを管理してくれていたから、大丈夫だという気持ちはあった。」と話していて、医師の方々が患者の治療に専念できるように、様々な工夫がされているのだと分かった。また、医師としてのことに関する質問で、手術前はどのような準備をしているかという質問に対しては、「手術室に入るところからのイメージトレーニングをしている。自分はボクシングをしているけれども、ボクシングの試合前にもイメージトレーニングをしていて、自分としては、手術とボクシングの試合は似ていると感じている。」と話していた。私も試合前にイメージトレーニングをすることがあるので、どんなことにおいてもイメージトレーニングは大切なんだと思った。今回の、国境なき医師団の方とお話で、将来に活かせる様々なことが得られた。

東大研修の企業訪問で、仙台厚生病院の方々のお世話となり、多くのことが学べた。この経験を最大限に活かしていきたいと思う。